



植柳の風

八代市立植柳小学校 校長室便り
平成31年2月25日 NO. 128

豊かな未来につながる学び

先週、19日(火)、県立教育センター研究発表会が開催される嘉島町民会館に到着したのは8時半頃だった。初めて場所を県央に移しての開催。1時間前に到着したのだが、すでに会場にはたくさんの県内教育関係者が訪れていた。研究発表会のテーマは、「一人一人が未来の作り手となる豊かな学びの創造～その学びは、子どもたちの豊かな未来につながっているか～」。私は、3人の講師による教育課題に対応した特別講演を拝聴した。



最初の講師は、新宿区立西新宿小学校 清水 仁 校長。「カリキュラムマネジメントで学校を変える」というテーマで熱弁を振るわれた。どんどん増える教育課題と校務改善。さらに東京でも教員のなり手不足が深刻化する中、従来の学校システムでは対応しきれない現状はいずれも同じ。それでも、校長として「毎日、学校に行くのが楽しみで、楽しみで仕方がない学校」を目指す学校像に掲げ、PDCAサイクルを全職員で常に意識して取り組むようにしてきたと語られた。校内研究システムを見直し、ワークショップや模擬授業、自主公開授業、様々な講師招聘事業などをはじめ、

「誰でもできる・全員で行うこと」を合言葉に、「話し合いの仕方」「ノート指導」などを全職員で共通理解・共通実践に取り組みされていた。

2番目の講師は、お茶の水女子大学 耳塚 寛明教授。「高い成果を挙げている学校に学ぶ」というテーマで、全国学力・学習状況調査等を活用し、家庭の状況と学力の関係などを分析し、成果を挙げている学校や家庭のどんな取り組みが効果的なのかを研究しておられる方である。



まず、家庭であるが、SES(家庭の社会的経済的背景)の学力への影響は明確ではないが、家庭における読書活動や生活習慣に関する働きかけ、親子間のコミュニケーションや親子の文化活動などは、いずれも学力に

プラスの影響力が大きかった。とくに家庭における読書活動は、子どもの学力形成に最も大きい影響力を与えていることを強調された。次に、学校の取組であるが、小中で一貫した学習規律の徹底、問題解決型の学習の展開をはじめ、質問紙調査から学校の課題を見出す取組、個別の補充学習の充実、良いノートを紹介し、取り組めない子どもには手厚く指導する家庭学習の指導などが、効果を上げていたとのことだった。



最後の講師は、文部科学戦略官 浅田 和伸 氏。「これからの日本の教育と高大接続改革」と題した講演は、子どもたちの意識調査を見ると、「学ぶことが楽しい」「学校で学んでいることが日常生活で役に立つと感じている」という項目が国際平均以下となっており、何のために学ぶのか、学習意欲の根幹が課題であることを指摘された。高校入試、大学入試のときは頑張るが、そのあとは燃え尽き症候群のような状態になっているのだ。そして、それは高校や大学の問題だと矮小化するのはなく、実は小・中学校からの学びの在り方にかかっていると述べられた。つまり、何のため

に学ぶのか、目的意識を明確にし、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることが、これからの日本の教育に求められると。

浅田氏は、最後に座右の銘を紹介された。『立志、魂に火をつける』単に教科の内容を教えることだけでも実に容易ならざる準備と研究を要するわけだが、さらに目を転じて、教育の眼目は、相手の魂に火をつけて、その全人格を導くということになれば、私たち教師の道が実に果てしないことに思い至らしめられるのである。極言すれば、教育の意義は、この『立志』の一事に極まると言っても過言ではない。」教育思想家 森信三氏の言葉である。